

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2004 年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学 研究科	日本文学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏 名			
	文学部・教授		小 峯 和 明 印			
<b>自然・人文の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	天神の物語・和歌・絵画—中世の道真像—					
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程 4 年		山 本 五 月 印			
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名			
<b>研究期間</b>	2004 年度					
<b>研究経費</b>	200 千円					

**研究の概要** (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

この世の生を終え、あの世にある人物がこの世をどうみつめているか。またこの世をどう動かしているのか。「死者が生者の世を支配していく」構造を、天神信仰を通じて考察する。菅原道真は人間が神となった「現人神」である。この世に生を受け、左遷の憂き目にあい、苦悩の後に死んで神となった。現実の苦悩を経た者への共感や鎮魂の念が、一つの信仰形態へと結実してゆく過程を追求する。

対象は『北野天神縁起』、室町時代物語『天神の本地』、道真仮託歌集など、絵画を含む中世期成立のテキストを中心とした。中世天神信仰は、天神の物語・和歌・絵画が一体となって、社会の広汎な層に浸透したものと捉えるからである。

託宣や和歌など、天神に仮託された言葉は、その時代に生きた人々の意思や願望の表出である。その諸相を追求することによって、日本人の宗教観・精神史における天神信仰の意義を解明する。また絵画の分析を通して、そこに隠された道真伝承の記憶を具体的に検証する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[ 北野天神縁起 ] [ 天神の本地 ] [ 道真仮託歌集 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、中世天神信仰にかかわる『北野天神縁起』や室町時代物語『天神の本地』などのテキスト・絵画(絵巻・掛幅画・絵本・版本)、および道真仮託歌集とその注釈書について未確認本の収集を行ない、詳細なリストを作成する。その上で、各テキストの特徴および諸本間の関連性を考察する。また、それと平行して『北野天神縁起』の各段の典拠を詳細に渉猟し、それらの説話の変遷過程を追究する。今年度は、以下の4点について、研究発表ないしは論文として、その成果を公表した。

## 1、『日蔵夢記』と天神信仰の形成(『説話文学研究』39号)

京都北野天満宮所蔵の『北野文叢』所収『日蔵夢記』は、書写奥書により、修験道当山派の寺院であった大和国、内山永久寺伝来の一本を、嘉永4年(1851)に書写したものであることが確認できる。このテキストの本文はかなり和習がつよい漢文で、難解な部分が多いが、この『日蔵夢記』こそ『北野天神縁起』『日蔵冥界巡歴』の段の典拠であり、かつて取りあげられることの多かった『扶桑略記』所引『道賢上人冥途記』は、これと同じないしは同規模の長い本文を有するテキストの抄出と考えられる。慈円が『愚管抄』に、「北野ノ御事ハ日蔵ガ夢記、人モチイネドモ、又ヒガゴトニハアラヌナルベシ」と記するのはきわめて示唆的であり、『日蔵夢記』は、『北野天神縁起』の成立に重要な役割を果たしたことが想像される。先行研究をふまえたうえで、このテキストを詳細に読解する作業を通して、以下のような結論をえた。

①『日蔵夢記』は、「万秋楽伝來說話」「延喜帝墮地獄譚」など、様々なテキストに引用される日蔵説話の淵源である。②『日蔵夢記』に登場する太政威徳天(菅原道真)や満徳法主天(宇多法皇)の言葉や姿にあらわれる「愛別離苦の悲しみ」あるいは「法華経護持」のイメージの強調が、天神信仰の形成過程において、他のテキストに重要な影響を与えた。③『日蔵夢記』が『北野天神縁起』の典拠として絵画化されたことにより、図像的にも新たなイメージが形成され、様々なモチーフが生み出されていった。とくに、「延喜帝墮地獄」に集約される傾向の強かった「日蔵冥界巡歴」の段が、室町期の絵巻において、『日蔵夢記』に対応する大威徳城や兜率天など、またそれとは別に阿修羅道を増補して描くようになった点は注目に値する。④室町絵巻の「延喜帝供養」の段に、僧侶による法華経書写や舞楽奉納の場面が描かれていることも、非常に示唆的である。僧侶の知識として存在した『日蔵夢記』の伝承が、仏事・法会の場で僧侶により語り継がれ、それらが室町絵巻に吸収されたものと推察されるのである。

## 2、道明寺天満宮蔵「北野天神縁起絵扇面貼交屏風」の特質—モチーフ絵画化の観点から—(説話文学会道明寺天満宮例会発表)

道明寺天満宮所蔵の「北野天神縁起絵扇面貼交屏風」(以下「扇面屏風」と略称)は扇面60枚に描かれた北野天神縁起絵を六曲一双の屏風に貼りつけたものである。扇面には折り痕が残り、当初は扇60握を一組として奉納されたものと推定されている。画風が異なるものも若干みられるが、多くは室町期の和絵の様式で、土佐光信から光茂の時期に、その周辺で製作されたことが予想され、十六世紀前半の作と考えられている。北野天神縁起絵の中では、全60場面という規模は、モチーフ絵画化の数が最も多いものといえる点、また詞書では著名な和歌以外はすべて漢文体で記す点などから稀少な作例と注目される。従来不明であったこの屏風の伝来は、最近道明寺天満宮で見出された『河州土師村道明尼律寺記録』により、一部明らかになった。

ここでは、まず扇面60場面について、絵画と詞書との関係を確認し、モチーフ絵画化の様相を明らかにすることを試みた。その結果として、この扇面屏風は通例の北野天神縁起絵に従いながらも、『道明寺縁起』の影響を受けて、ストーリーに変化がみられることがわかった。つぎに、「日蔵冥界巡歴」の段の絵画化が10場面にも及ぶ点に注目し、内容の近い三重県杉谷神社蔵本、神奈川県立歴史博物館蔵本などとの比較を通して、これらと室町期の時代相を共有することを明らかにした。さらに、その絵画化の特徴を、典拠である『日蔵夢記』との比較を通して検討することにより、「扇面屏風」の『日蔵夢記』享受の様相を探ってみた。中世の様々な道真伝承を吸収し、モチーフの絵画化が増大してゆく室町期の天神縁起絵の作例の一つとして、「扇面屏風」は非常に興味深いテキストであるとの結論をえた。

## 研究成果の概要 つづき

## 3、天神の物語と和歌—お伽草子『天神の本地』成立考— (『論集 太平記の時代』)

お伽草子『天神の本地』は、菅原道真の筑紫への左遷と讒言者時平への復讐、そして北野の地に神として祀られるまでを描く。『北野天神縁起』を基盤としつつも、左遷の経緯を改変し、内容を簡略化することによって、物語的興趣を増幅させ、道真の伝承を浸透させる大きな役割を担った。また、『北野天神縁起』にみえる漢詩を省略し、中世から近世にかけて数多く編まれた道真仮託歌集所収歌を多く用いる点でも注目され、この物語の生成過程における天神信仰の一端をうかがうことができる。

諸本の内容を比較すると、以下の絵巻3本が同系統の本文をもつことがわかる。

①天理図書館蔵二巻本『天神のゑんぎ』

②押方重信蔵本

③大阪天満宮蔵本(目録題『御絵伝記』)

これらのテキスト(以下「天理二巻本系統」と称する)は、諸本のなかでも後半部の構成が『北野天神縁起』に近く、「お伽草子本文の非常に古い形のものに、安楽寺本系統の縁起の本文を組合わせたもの」との指摘がある。また、末尾に「天神御詠歌」として、つぎのような和歌をのせる。

おもひきるころのつるぎひとつだにあらばうきよのつなはものかは

この和歌は、「右一帖瑠璃之壺と云」との識語を付す道真仮託の百首や、『菅家御詠集』などの名称をもつ歌集にもみえ、文安5年(1448)の奥書をもつ『菅家金玉抄』では釈教歌の部に収められて、以下のような注釈が付されている。

古事ある事(あたる)也。ながきによりてもらし侍り。経文に沙汰せし事もあり。

ここにいう「古事」は、道真・天神の本説あるいは因縁としての説話であり、お伽草子『天神の本地』の内容を指すものと想像される。天神の物語や縁起とともに語られる和歌は、要約や象徴だけでなく注釈としても機能し、より深い次元で連なりあっている。『法華経』の各品の一節と天神和歌を並記する『妙法天神經』では、釈迦をめぐる言説をつづった経文と天神和歌は一具のものであった。「おもひきる」歌は、天神の「古事」を集約し、これを唱えるものへの加護を保証した呪歌である。

ここでは、この「おもひきる」歌の解釈を通して、お伽草子『天神の本地』の内容理解をさらに深く掘り下げ、その成立事情を検討した結果、以下のような結論を得た。

天理二巻本系統は、後半部分の構成が『北野天神縁起』に近似する点、また道真左遷の経緯の記述に物語の初期形態をうかがわせ、御霊信仰との関わりをみせる点などからも注目される。お伽草子『天神の本地』の特徴である「内裏放火」のモチーフは、『伴大納言絵巻』の影響であることは明らかだが、「両張面」説話に、伴大納言が登場すること、また道真が背が低いということから、『小男の草子』や「五条天神」との関わりが見出せ、そこには疫神、御霊神としての道真・天神の姿が見出せる。特に、応永28年(1421)の五条天神流罪は、「両張面説話」さらにはお伽草子『天神の本地』成立に深く関わるものと考えられる。

道真が、「長谷の観音堂の南のはずれよりとび出させ給ひし人」という表現は、『天神の本地』諸本の多くに共通するモチーフだが、そこには与喜天神や染田天神における法楽連歌隆盛との関連が想定される。和歌・連歌の神としての信仰の高まりが、多くの道真仮託歌を生み出し、それが『天神の本地』へも吸収され、新しい物語が創り出されていったのであろう。そして、連歌関係の資料の検討から、この物語の成立には、応永年間(1394~1428)の連歌隆盛がかかわるものと想定される。

さらに、天理二巻本系統の末尾に付された「おもひきる」歌からは、左遷による愛別離苦の悲しみと、時平への怨みが忘れられず苦しむ、極めて人間的な道真像が浮かびあがる。それは、世の乱れや天変地異の原因が道真の怨霊によるものであることを最初に記したと考えられる『日蔵夢記』にみる道真像と重なるように思われる。ここでは、その御霊神的性格を強調すると同時に、この世で同様の苦しみを受ける人々は必ず守護しようという神意の激しさを強調しているのである。

道真仮託歌集に収められた和歌は多様である。歌語を適切に用いた正統な歌もあれば、そうでないものもある。むしろ、道真真詠は少なく、その境遇に合致する他者の詠歌、そして作者不明の歌が数限りない。しかし、それゆえにそれらの和歌・歌集には天神信仰の様々な姿が凝縮されている。そこに自らの願いを託し、書写し、語り継いできた無数の人々の強い意志が、天神信仰を支え、新しい天神の物語を生み出した。そして、現代に生きる私たちにも絶えずメッセージを投げかけているのである。

#### 4、天神と童子—中世天神信仰の物語と図像—（『中世文学』50号）

中世天神信仰は、天神の物語・和歌・絵画が一体となって、社会の広汎な層に浸透した。天神をめぐる諸テキストに描かれた絵画を、物語や和歌と合わせて詳細に分析し、そこに隠された道真伝承の記憶をたどることは、中世の天神に対する共有のイメージをあぶりだすことになるであろう。ここでは、京都の個人が所蔵する「菅公ならびに童子図」を端緒として童子化現伝承に注目し、中世天神信仰に関する新たな解釈を試みた。

この天神と童子を共に描いた画像は、平成14年（2002）の道真没後千百年を機に所在が確認された新出資料である。天神の肖像画は、北野天満宮などに14世紀以降の作品が現存するが、このように童子を伴うものは他に例を見ない。

絹本着色、一舗。軸装で、巻留に永仁4年（1296）12月の年紀と藤原孝久という人名が墨書され、この藤原孝久を含む系図断簡2紙が付属しているが、この人物については未詳である。永仁4年は、画像の製作時期を示唆する年紀であるが、一部に手本を写したと思われる箇所があることから、14世紀中頃の製作とされる。あるいは、永仁4年に製作された画像の写しとも考えられる。

画面構成を確認すると、中央に上畳に坐す束帯姿の天神を、その右手前に耳で髪をまとめた美豆良姿の童子を描く。天神の押さえつけるような笏の持ち方や、怒りをたたえた目は、典型的な「怒り天神」の特徴を示し、怨霊としての面影を宿している。手前に道真ゆかりの梅と松が入った青銅の華瓶を描くのは、その奥に描かれている人物が、礼拝の対象とされていたことを示す。童子の着衣や手に持つ檜扇には、道真ゆかりの梅の文様が描かれており、童子も道真、あるいは道真の化身とみてよいだろう。

上部の色紙形には、右に、『菅家後集』所収の漢詩「不出門」の一節、中央に、道真作として著名な「こちふかば」の和歌が墨書されている。左遷にまつわる道真の著名な漢詩と和歌を色紙形に記し、束帯姿の天神とその化身と思われる童子を描くという点から、この童子を伴う天神画像は、『北野天神縁起』の内容を一つの画面に集約したものとも考えられる。ややつりあがった童子の目は、賢さと同時に神聖さをも表現しており、俗体で描かれた道真が天神であるならば、美豆良姿の童子は、本地の十一面観音とみることも可能であろう。神像彫刻には、像内に本地の仏菩薩の姿や、それらを示す梵字・真言などを書いたり、納めたりする例がみられるが、絵画の場合には、このように、天神の肖像に重ねて、本地の観音を示す童子を描いたものと想像される。

天神を信仰し、天神和歌を唱える者の前には、あたかも天神の使役の童子のごとく、本地の十一面観音が顕れる。「童子を伴う天神画像」はそのことを示そうとしたと考えられる。この画像に端を発して、天神と童子の行方を追い求めたが、近年注目されている童子の問題に、天神信仰も深く関わっていたことを再認識する結果となった。従来天神をめぐる研究の中で、童子の姿は必ずしも重視されてこなかったようであるが、中世の典型的な物語および図像として、今後さらに追求する必要があると思われる。

※ この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。